

PISA2025 の調査結果

2025 年 PISA 調査では、日本は

「読解力」で 4 位、

「数学的リテラシー」で 4 位、

「科学的コンピテンシー」で 5 位と、

国際的に高い水準を維持しています。(OECD加盟国では一位)

しかし、3 分野とも低得点層の割合が上昇し、特に「読解力」の分野では速く正確に読む『読みの流ちょう性』の正答率が下がるなど、平均点が低下していることが分かりました。

これらの結果を踏まえ、2030 年度以降に実施される新しい学習指導要領で改善が図られることが検討されています。

主要分野の概要

◆読解力

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組む能力

◆数学的リテラシー

数学的に推論し、現実社会にある様々な文脈において問題を解決するために数学を定式化し、活用し、解釈する個人の能力

◆科学コンピテンシー ※2025 年調査では分野名「科学的リテラシー」から「科学コンピテンシー」へ改称。

「現象を科学的に説明する」「科学的探究のための計画を構築し、評価し、科学的データと証拠を批判的に解釈する」「意思決定と行動のために科学的情報を調査し、評価し、利用する」能力。気候変動の時代における持続可能性の問題に取り組む能力(環境リテラシー)も含む

参考③ PISA2025年調査の国際比較（3 分野の結果一覧）

	科学コンピテンシー	平均得点	読解力	平均得点	数学的リテラシー	平均得点
1	北京・上海・江蘇・浙江	597	シンガポール	535	北京・上海・江蘇・浙江	612
2	シンガポール	560	北京・上海・江蘇・浙江	527	シンガポール	563
3	マカオ	541	台湾	508	マカオ	549
4	台湾	540	日本	503	台湾	546
5	日本	538	マカオ	501	日本	525
6	エストニア	527	韓国	501	韓国	522
7	韓国	526	アイルランド	500	香港	522
8	イギリス	511	エストニア	499	エストニア	508
9	カナダ*	510	ニュージーランド*	497	スイス	499
10	ニュージーランド*	509	イギリス	494	イギリス	488
11	オーストラリア	509	オーストラリア	491	カナダ*	485
12	フィンランド	504	カナダ*	490	ポーランド	484
13	アメリカ*	502	アメリカ*	490	オランダ*	483
14	スイス	501	ポーランド	482	アイルランド	480

PISA は、OECD（経済協力開発機構）が実施する、15 歳の生徒が「知識を実生活の中で活用する力」を測る国際調査です。

2025 年調査には、91 か国・地域、約 76 万人が参加。日本からは約 6,500 人が参加しました。

日本の結果

分野	日本の平均得点	OECD 加盟国での位置
科学コンピテンシー	538 点	1 位
読解力	503 点	1 位
数学的リテラシー	525 点	1 位

つまり、PISA 開始以来初めて、日本が OECD 加盟国中、3 分野すべてで 1 位となりました。（なお、全参加国・地域で見ると、日本は、科学 5 位、読解 4 位、数学 5 位という非常に高い水準です。）

ただし、ここが非常に重要です

「日本は 1 位だった。日本の子どもたちの学力は素晴らしい」だけで終わらせてはいけません。今回の結果には、学校教育にとって重要な「二つの顔」があります。

① 日本の高い学力水準は維持された

OECD 平均は 2015 年以降、低下傾向にあります。

一方、日本は 3 分野とも大きな低下は見られず、高い水準を維持しています。

特に、科学コンピテンシー、読解力、数学的リテラシーについて、日本の生徒は国際的に高い水準にあります。

② 一方で「低得点層」が増えている

ここは、学校現場として非常に注目すべきところです。日本では今回、3 分野すべてで「低得点層」の割合が有意に増加しました。

一方、高得点層については大きな変化がありません。つまり、上位層の力は維持できているが、下位層への支援がより重要になっているということです。

特に「読解力」が課題

今回、日本で 2022 年から有意に低下したのは読解力です。日本の読解力は、516 点 → 503 点となり、13 点低下しました。

ただし、興味深い結果があります。「評価し、熟考する」は上昇一方で、情報を評価する考えを比較する熟考するといった問題では、正答率が有意に上昇しています。

反対に、「速く正確に読む」＝読みの流暢性については低下しています。

これは学校教育を考える上で、とても示唆的です。

科学も「知識」だけではない

今回、科学分野の名称そのものが、「科学的リテラシー」→「科学コンピテンシー」に変わりました。単に、「理科の知識をどれだけ覚えているか」ではありません。

例えば、現象を科学的に説明する、科学的な調査方法を考える、データや証拠を批判的に読み取る、科学的情報を評価する、その情報をもとに意思決定するという「知識を使って考え、判断し、行動する力」が重視されています。

これは、先生が木上小の付けたい資質・能力である「判断力」とも非常に重なります。

「日本の子どもたちは、知識を活用する力を高い水準で身に付けている。しかし、すべての子どもがその力を発揮できるようにすることが次の課題である。」

特に学校現場では、

① 読む力

↓

② 情報を比較・評価する力

↓

③ 自分で考える力

↓

④ 判断する力

↓

⑤ 他者と協働して問題を解決する力

という授業づくりが、これまで以上に重要になってくると思います。

そして、これは木上小の「読解力・判断力・協働力」という資質・能力の育成と、かなり親和性があります。

【資料】文部科学省・国立教育政策研究所 令和8年9月8日

PISA2025のポイント



https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pisa/pdf/2025/01_point.pdf?utm_source=chatgpt.com

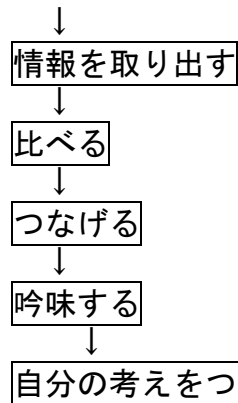
■ 校内研修とのつながり

「速く正確に読む」力を付ける
「読んで答える」だけではない。

+@ = これからの「読解力」とは？「文章を読

読解力とは

読む



そして、「なぜ、そう考えたの？」に、本文や資料を根拠に説明できること。

(熊本県重点指標 2 関連)

■ 木上小で付けたい資質・能力とのつながり

読解力 (情報を読み取り、意味を考える)



判断力 (根拠をもとに、自分で決める)



協働力 (友達と考えを交流し、よりよい考えをつくる)

「読む」→「考える」→「対話する」→「決める」

■ 授業改善

上記を受けた授業改善 教職員の意識化

「教える授業」から「考えさせる授業」 児童の活動 : 教師の指示・発問 = 7 : 3

今後の授業研究では、次の3つを意識したい。

- ① 読解力：子どもは何を読み取り、何を根拠にしたか？
- ② 判断力：自分の考えを持ち、選択・決定できたか？
- ③ 協働力：友達との対話によって、考えがどう変化したか？

「活動によって何が分かったか・考えがどう変わったか」を見る。

「PISA で1位だったから、今の授業でいい」ではありません。

日本の子どもたちの力が高い今だからこそ、すべての子どもが『分かった』『考えた』『友達と学んだ』と言える授業をつくっていききたい。

そのために、木上小学校では、「読解力・判断力・協働力」を、毎日の授業の中で育てていきたいと思います。

「授業が変われば、子どもが変わる。」PISA2025 を、本校の授業改善につなげていきたいと思います。